パネルディスカッション

『明るい社会づくり運動　今後への提言』

と　き：2006年9月1日／ところ：普門館地下ホール

コーディネーター：豊田雅行（特定非営利活動法人明るい社会づくり運動常務理事）

パネラープロフィール（敬称略）

菅波　茂（特定非営利活動法人AMDA理事長）
1946年生まれ。医師、岡山市内に菅波内科医院を開業、老人保健施設「すこやか苑」開設。1984年AMDA（アジア医師連絡協議会）を設立し、1995年には国連NGOに認定。2001年公設国際貢献大学校の初代校長に就任。2007年岡山県明るい社会づくり運動会長に就任予定。

平岡 宏一（学校法人清風学園専務理事・本法人理事）
1961年生まれ。インドのギュメ密教学問寺に留学し、外国人として初めて正式に伝授されたことを示す証明書を受ける。清風中学校・高等学校副校長、学校法人清風学園専務理事を務める。1990年インド、1998年東京、1999年アメリカおよび2006年11月広島県宮島大聖院において、ダライ・ラマ14世の説法会・日本語通訳を務める。現在、特定非営利活動法人明るい社会づくり運動理事（近畿拠点）。

山野井 克典（協力団体・立正佼成会理事長）
1941年生まれ。1964年立正佼成会に入職。人事部長、財務部長などを歴任。その間、庭野平和財団で財団活動に従事。2002年理事長に就任。現在、新日本宗教団体連合会(新宗連)理事、世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会評議員、国際自由宗教連盟（IARF）国際委員会評議員。

【豊田常務理事】本日は『明るい社会づくり運動　今後への提言』と題しまして、パネラーの先生方より、今後の私どもの運動にご示唆を頂戴したいと思います。また、先ほど多湖先生から頂いた基調講演とも関連の深いお話が出るのではないかと期待しておるところでございます。

それでは、最初に平岡先生に、明るい社会づくり運動の理事にご就任された経緯と提唱者・庭野日敬師への想いについてお聞かせ願いたいと存じます。

◆提唱者・庭野日敬師への想い

【平岡先生】私の叔父が、大阪府知事選挙に出馬した際に、様々な宗教の方とお付き合いができたのですが、最後までお付き合いが残ったのが立正佼成会さんでした。

当時、泉州教会長でありました有路誠市郎先生から「こういう明るい社会づくり運動があるから、お前もやらないか?」と誘って頂いて、私もこの運動に参画させて頂くことになりました。

私が、凄いと感じたのは、普通の宗教であれば自分のところの宗派の信者の安穏といった話になるのですが、この立正佼成会の開祖(提唱者)は、立正佼成会の信者だけではなく、すべての人に「明るい社会をつくろう」という呼びかけをなさったということで、感動を深くいたしました。

かつて私が、インドとアメリカでダライ・ラマ14世の通訳をした際に、ダライ・ラマが、アメリカ人の質問に応えて「宗教を信じるか、信じないかということは、個人の贅沢の問題だ。ですから、宗教を信じようと信じまいとそれは個人の問題である。だけど、親切心と思いやりの心を持って行動するかどうかというのがポイントで、親切心と思いやりの心をもって行動するならば、その人が意識する、しないに関わらず、それは仏教の実践である。逆に、いかに信仰心があっても、思いやりの心を持って実践することがなかったら、それは仏教者ではない」というお話をされて、非常に感動したことがありました。先ほどもDVDの上映にありましたように、提唱者は「一切衆生を救おうという真心」ということを何度も強調なさいました。

信仰心のある人はもちろん、信仰心の無い人の心にも、「慈悲」「思いやりの灯火」を付けようという運動が、この明るい社会づくり運動であり、それは仏教の菩薩行そのものの実践であると考えているのです。

しかし、宗教活動というのは大概どの宗派でも、基本的には「自利」つまり、自分の救済ということが中心になっています。しかしながら、明るい社会づくり運動は、徹底した「利他」。利他行しかないのです。そういう意味で非常に厳しい行だと思うのですが、最終的に仏陀の誓願は、「一切衆生を救済しよう」ということですから、特定の信者を救済しようということではありません。その様なことを誓願された提唱者は大変な方だと思っております。

残念ながらご存命の間に、庭野先生のご尊顔を拝することはできなかったのですが、このようなご縁を頂戴して、私は、庭野先生からご使命を頂戴したと勝手に思っております。

この明るい社会づくり運動は、本当に菩薩の大誓願だと思っておりますし、その誓願を達成したいと思っておりますので、ほんの少しでもお役に立つことができたらと思っております。

【豊田常務理事】ありがとうございました。平岡先生はダライ・ラマ14世の通訳をされており、我が国におけるチベット仏教の第一人者でございます。

さて、枠を超えた宗教心ということでございましたが、昨日もWCRPの報告集会がございました。やはり共通のテーマは、「自分の所属する共同体の立場にではなく、どこまでも信仰者は神様仏様の側に立つことが必要だ」ということが強調されておりました。平岡先生のご意見も、まさにその通りあると伺わせていただきました。

それでは次に、協力団体・立正佼成会理事長の山野井先生から、提唱者・庭野日敬師の明るい社会づくり運動に寄せる想い、願いについてのお話を頂戴したいと思います。山野井先生お願いいたします。

◆提唱者・庭野日敬師の明るい社会づくり運動に寄せる願い

【山野井先生】それでは、提唱者の願いは何だったかというところを、もう一度考えてみたいと思います。今年は提唱者・庭野日敬師の生誕100年であります。この100年を記念して、「提唱者は我々に何を願ったのか」をテーマに、もう一度原点に還って考えてみようということを立正佼成会会員一同で取り組んでおります。

私も改めて提唱者が明るい社会づくり運動をどのようなお気持ちで創られ、どのようなことを願われたのかということを、もう一度いろいろな書物で振り返ってみました。

そうしますと、昭和44年の高松でしょうか。このような趣旨の発言がございました。

「荒んだ心の状況を改善し、何とか心を豊かにしたいという願いのために、明るい社会づくり運動というものを提唱して進めて行こうということでスタートいたしました。この心の荒廃を改善するためには、立正佼成会だけの運動ではなくて、それぞれの地域で一生懸命取り組んで頑張っている人たちの智慧をお借りしながら一緒に考えていこうというものです」

この明るい社会づくり運動を提唱する2年ほど前に、提唱者は仏教思想高揚運動や精神文化高揚大会といった名前で、それぞれの地域で、「心を豊かにしましょう」という呼びかけをしておりました。この呼びかけは、かなり多くの方からご賛同をいただき、反応が良かったということで、昭和44年の高松を最初に、明るい社会づくり運動をスタートしたのだと思います。

この明るい社会づくり運動の根底といいましょうか、最も大事なところは、先ほど平岡先生が触れられましたように、立正佼成会だけの運動ではなく、地域社会の人たちが英知を集めて、日本という社会を明るくしたい、そして世界を平和にしたいという運動であったかと思います。あくまでも立正佼成会は、陰役を一生懸命させていただいて、大勢の心ある人たちのお力を借りたいということでこの運動に取り組まさせていただきました。しかし、37年間でこの心を改善するということは大変難しいことであったと思うのです。

最近、新聞を賑わせている少年の凶悪事件は、人々の心を本当に唖然とするものです。こんな時代だからこそ、荒廃した心の改善を、みんなで一生懸命やらなければいけないのだと痛切に感じております。

そのようなことを振り返る意味では、生誕100年というのは、我々にとって大きな節目であり、再出発の原点に還る良い時期ではないだろうかと思います。ありがとうございました。

【豊田常務理事】ありがとうございました。まずそれぞれの立場を越えて、地域の人々が英知を集めるということ。そしてもう一度、豊かな心というのはどういう心なのかを、かみしめることも大事ではないかというご提言を頂戴いたしました。

続いて、菅波先生より、国際的に実践された立場から、NGOの創設者として、AMDA創設と運営の情熱の源をお伺いしたいと存じます。それではよろしくお願い致します。

◆NGO創設と運営の源

【菅波先生】私達AMDAは国連NGOとしてやっているのですけれど、私達が一番の目標としているのは、「物の見方、考え方が違う人がどうやったら一緒にやっていける」かということです。

私自身の結論は、やはり苦労を共にするしかないということです。苦労を共にするなかで、自分にないものを相手に見つけたときに、尊敬の念が起こりますし、どんなに苦労が深くなっても決して相手が逃げないというときに、信頼という人間関係ができると思います。すなわち、尊敬と信頼という人間関係を持ったときにはじめて、物の見方考え方が違う人が一緒にやっていけるのだと思っております。

それでは何のために、一緒に苦労を共にするのかということですが、先ほど山野井先生も言われましたように、平和ということなのです。私達の考えでは定義のないところにアクションプランは無いということで、私達は「今日の家族の生活と、明日の家族の希望が実現できる状況が平和である」と定義しております。「今日の家族の生活」とは、食べれて、健康であることであり、「明日の家族の希望」とは、子どもに教育を受けさせることです。

このような家族の平和を邪魔するものとして、戦争、災害、貧困があります。このためにプログラムをやっ

ているのですが、国際社会というのは、実は宗教を抜きには語れません。私達は29カ国に支部がありますが、インド、ネパールでしたらヒンズー教を信仰していますし、バングラディッシュ、パキスタン、インドネシアではイスラム教を信仰しています。要するに私達の社会、AMDAというのは多宗教集団であり、WCRPがそのままAMDAの中にあります。

そのなかでリーダーである私が一番大切にしていることは、クリスチャンの人と話をするときには、聖書を読んで、聖書の中のキーワードを引用します。そしてイスラムの方にはコーランとかスンナの中からキーワードを引用します。スンナという中のキーワードというのをこちらが理解して、そのキーワードでお話をしていくといった作業を大切にしております。

そのなかでひとつわかったのは、この人は信頼できるか信頼できないかというときに、私は、基本的に宗教を持っている人は信頼しているし、持っていない人は「この人はどこでどうひっくり返るかわからない」という気持ちを抱いているということです。

つまり、本当に様々な困難を共にするなかで、尊敬と信頼という人間関係を持てる人というのはそんなにいないということなのです。

また、国際社会で本当に協力するというとき、どこに行っても見られるのは、一番身近な家族はどうなっているのかということです。宗教の下には、まず家族があります。したがって、AMDAの各国の支部長も私達の家族を見ています。そういった意味で今日、多湖先生が言われたことも、山野井先生が言われたことも、すべて含めまして、その基本である宗教というものをどう理解していくかということが、国際社会ではコミュニケーションのキーワードになっていると思います。
ありがとうございました。

【豊田常務理事】 ありがとうございました。国際社会は、宗教抜きでは協力ができないということがはっきりわかりました。また、価値観の違う方々と信頼関係を築くには、共に苦労することであるいうことも学ばせて頂きました。この2点は、私どもの活動にも重要なキーワードであると感じた次第であります。

そして、国際社会では、家族の絆がないと信頼関係が築けないということも教えていただきました。

それでは、教育者のお立場から、平岡先生に、青少年育成の原動力となっているお考えと、日頃の教育で心がけていることをお伺いしたいと存じます。

◆青少年育成の原動力

【平岡先生】 清風学園には、「福の神のコース」というのがあります。それはどういった内容かと申しますと、勉強ができるだけでは困るということで、まわりの人を幸せにできるような人を育てるということです。私達はそういうことを本校のコースにしております。

もともと宗教教育というのは、生徒募集にマイナスになるのではないかということで、一時あまり打ち出してはいなかったのですが、やはりそれは違うのではないかと思いまして、最近では全面的に出しております。

私達の学校は、真言宗と関係がありますので、高野山へ二泊三日の研修に行くのです。もちろん高野山の高僧のお話も聞きますが、95%ぐらいは、私の話を聞くのです。どういうコンセプトで学校が創られたのか、どういう教育を目指しているのか、という話を二泊三日に渡っていたします。私は現代の子ども達に対してそんなに悲観的ではないですし、彼らはそういう話が好きなのです。

これはやや手前味噌な話ですが、先日もこんなことがありました。説明会に行ったら、お母さんが一人出て来られまして、「今日お礼に参りました」と言うのです。よくお話を聞くと、私達の学校を卒業して、いま医学部を目指して浪人生をしているH君のお母さんでした。そのH君は親族の集まりで、薬剤師をしている叔父に「医者なんか辞めておけ!これからは裁判ばかりだし、儲からないぞ。薬剤師のほうが絶対将来性があるから、薬剤師になれ」と言われたそうです。その時にH君が、「俺と叔父さんとは考え方が違う。俺は金儲けできるかどうかが価値基準で、医者を目指しているのではない。自分は困った人達を救うために医者を目指しているんだ!」と言ったそうです。お母さんは喜んで「あなたの志は正しい、何浪してでも私が稼いで医学部行かせてあげるから、医学部を目指しなさい」と言ったというのです。そのようなお話を聞かせて頂き、「先生、そんな子どももたくさんおりますから、先生も勇気を持ってやってください」と言われました。私は、翌朝の朝礼で生徒に「うちの学校はそういう学校なのです。そういう子ども作りを目指しているのです」みたいな話を一生懸命したのですが、子どもはそういう話は嫌いじゃないのです。人のお役に立ちたいという気持ちを大いに持っているのです。

先日、フリーター問題の専門家である鳥居徹也先生とお話をすることがありまして、フリーターが何故フリーターになるかという話を伺いました。どのような人がフリーターになるかと申しますと、例えば、勉強が得意でない子がいたとします。勉強ができないので、家でも「勉強しなさい」ばかり言われる。要するに、ほとんど褒められることが無いのです。しかし、アルバイトに行ったら「君がいないと店が回らないよ」と言われるのです。人の役に立った経験が無いので、とても喜んで、そのアルバイトにのめり込んでフリーターになってしまうというケースがものすごく多いということです。

しかし、モチベーションは悪いことではないと思います。結果的にフリーターになっていますが、現代の若者は“人の役に立ちたい”という気持ちをしっかり持っているということです。

ですから、我々大人が、子ども達に「勉強しなさい」ばかり言うのではなく、何故勉強をしなければならないのか、その意味はどういうことなのかということを、辛抱強くしっかり語りかけていくことが大切で、現代の子どもはそれに応えるだけの技量はしっかりあると思っております。

昔の子どもと現代の子どもと比べると、確かに多くの問題はあります。しかし、子どもの心はきれいで、志も高いのです。それを変な方向に向けてしまうのは、我々大人の問題であって子どもの問題ではないと思います。

僕らの未来や夢を託せるのは、やはり子どもです。その子どもにしっかり夢を語っていくことが、大切であると私は考えております。

【豊田常務理事】ありがとうございました。実際の教育現場から、子ども達は「役に立つ人間になりたい」という心があるという力強いお話でございました。私達も、もう一度その心を見直して、正面から青少年に触れ合っていくことが大切であると教えて頂きました。

先ほども、青少年の問題等も出てまいりましたが、ここで山野井先生に、現在の世相を踏まえ、今後の明るい社会づくり運動に期待することについてのお話を頂戴したいと思います。

◆今後の明るい社会づくり運動に期待すること

【山野井先生】明るい社会づくり運動の狙いとするところは、みんなが心豊かに生きたいということですから、ここに到達することが、この運動の目標だと思います。

しかし、具体的に何をするかということで、大変ご苦労も多いかと思います。明るい社会づくり運動の会報などを見せていただきますと、全国各地で素晴らしい活動をされているということで、いつも感心しております。

この明るい社会づくり運動を通して人材育成につながっていくということになるとありがたいですし、実際に参加している方の人格的な向上につながれば、更にありがたいと思います。ここが難しいところなのですが、それがこの運動の大事なポイントだと思います。また、女性の声を反映していくことも必要ではないかと思います。

そのためには、地域で議論を交わしながら、現在の活動について、問い直してみることも必要ではないかと思います。現在の活動を続けていこうというのも大きなひとつの決定だと思いますし、どこかの時点でもう一度見直してみよう、その時代の変遷、いまの時代はどういう時代なのかということを考えてみようということも必要かもしれません。

現在、日本は急速に“高齢社会”になり、それぞれの地域で、様々な問題が発生しているようです。例えば、お年寄りがお年寄りの面倒を見る、老老介護の問題をどう考えようかとか、様々な問題の視点があるかと思いますので、「自分達の明るい社会づくり運動はこのままでよいのか」ということも考えていくことが必要なのではないでしょうか。

ある学校の先生に、世界13カ国の中高生にアンケートを取ったという話を聞きました。残念ながら、日本は家庭のお手伝いをしない子が一番多い国なのだそうです。それからゲームも含めてテレビを見る時間が一番多いのも日本で、さらには、親を思う気持ちが一番ないのが日本なのだそうです。これをどう考えていくのか、日本はそんな国ではなかったはずです。親思いの良い国。それが日本だったと思います。しかし、先ほど平岡先生が、子ども達を信頼しているという話を聞いて、ありがたいなと思いました。「ダメだ、ダメだ」といってもいけませんので、そういうことも、みんなで考える風潮の世の中が必要だと思っています。

みんなで子どもはダメだということじゃなくて、みんなで地域社会を明るくするためには、総力を結集して行くということを考える時期ではないかと思っております。

【豊田常務理事】ありがとうございました。運動に携わる者の心の成長ということがポイントであることを再確認させて頂きました。議論を交わしたり、様々なことを試みたり、具体的な形作りをしているなかで、私達の心の確認はどうであったか、という振り返りが大切であるということを教えて頂きました。

さらには、地域社会のニーズをしっかりとらえ、現在の活動をもう一度見直していくことの必要性についてもご示唆くださいました。

それでは続きまして、菅波先生より、今後、AMDAが明るい社会づくり運動とジョイント（協働）して実現したいこと（事業）についてお聞かせ頂きたいと思います。

◆明るい社会づくり運動と協働したいこと

【菅波先生】やはり“明るい社会”というのは、「ありがとう」という言葉が飛び交っている社会だと思います。そして、「人権」というものに定義があるのなら、それは「あなたを認めてますよ」ということであると思います。

具体的には、「あなたのことを忘れていません（名前を呼ぶこと）」「あなたに関心があります」「挨拶をすること」。そして、一番大切なのは「あなたを必要としています」「ありがとう」ということであると思っております。

問題は家庭の中で、親が子どもに「ありがとう」と言うチャンスが少なくなっているということだと思います。

ではなぜ、家庭の中で、親が子どもに「ありがとう」と言わないのかと言いますと、親が用事を言いつけて子どもが断ったときに、親がどうしたらいいかわからないというのが原因です。子どもと正面向いて付き合うということは、子どもが「嫌だ」と言ったときに、親が「そんなことは駄目だ」ということをハッキリと伝え、用事をやらせて、そして用事を手伝ってくれた子どもに「ありがとう」ということだと思うのです。その行為によって、子どもは自分が必要とされていると認識するのです。現在は、それをしないことに一番問題があると思います。

「ありがとう」と言うためには、「ありがとう」というだけのことをしてもらわないといけないのです。子どもは親に養ってもらっているわけですから、親が子どもに「ありがとう」という時は、用事を言いつけたこと以外にはないのです。子どもが親に対して「ありがとう」ということが自然な姿であるということです。

家庭の中で「ありがとう」という言葉が、お互いに飛び交うことが、家庭の再建に必要であり、親子関係を考えるときにも大切なことなのではないかという気がしております。

そして、もっと大切なことは、私たちAMDAがなぜ緊急救援に出向くのかということです。阪神大震災の時もそうだったのですが、人間の人智を超えた不条理という場面にぶつかり、人間が絶望という状況に陥ったときに、何を一番望んでいるかと言うと、「私達はあなたを見捨ててませんよ」ということです。すなわち、「自分たちは見捨てられてはいないのだ」という感覚を持ったときに、人間は絶望から希望に向かっていけるものなのです。これが一番のメッセージになります。

そういった意味で、明るい社会づくり運動も、「ありがとう」という言葉が、地域あるいは家庭に、飛び交うような仕掛けをしていくことが必要であると考えます。

「ありがとう」という言葉と、不条理に面した人達に対して「あなたを見捨てません」という言葉。この二つのキーワードというものを使わせていただければ、AMDAの今までやってきたことで、少しはお手伝いできるのではないかと思っております。

【豊田常務理事】ありがとうございました。「ありがとう」というキーワードを頂戴しました。私達の運動の中でも「ありがとう」という言葉が頻繁に出るように心掛けていきたいと感じさせて頂きました。

ここで、それぞれのお立場から、明るい社会づくり運動に期待するもの、もしくは働き掛けについてお伺いしたいと存じます。

それでは、平岡先生に明るい社会づくり運動の新体制について、理事としての抱負と今後の運営の方向付けについてお伺いしたいと思います。

明るい社会づくり運動の新体制について

【平岡先生】私達の学校で、生徒の食生活と家庭環境についての調査を致しました。そして、大学に現役合格した生徒のデータをその中から抽出すると、有名大学に合格した生徒全員が、家庭において自分の役割があったということがわかりました。

それから、家族で一緒にご飯を食べている生徒の家庭の方が、学力が高いということもわかりましたし、家庭が上手くいっていることがわかりました。

現代は、例外的な話があったらそれに飛びついてしまうことが典型であるというように考えがちですが、少なくとも、このデータ上では、上手くいっている子ども、勉強がスムーズにいっている子どもの典型は、非常

に古典的な家庭であるということがわかりました。

つまり、家族が仲良くて、子どもと一緒に晩御飯を食べて、お母さんは栄養価を考えてしっかり料理を作って、子どもには家での役割を与えているということです。やはり、健全な家庭のありようが、情緒を安定させ、学力の高い子どもを育てていける前提なのだと思います。それが今も変わってないと思います。

それでは、明るい社会づくり運動の新体制のことについて触れたいと思います。佼成会の信者さんの一部には「佼成会のことは一生懸命やるけれども、明るい社会づくり運動はなぁ…」というような雰囲気があるように思えます。こんなときだからこそ、新しい改革をいろいろと考えていくことは、非常によいことであると思っています。新しい改革をどんどんやっていくということは、閉塞感を打破する最も大切なことだと思います。ですから、勇気を持って応援していきたいと思っております。

皆さまも、いままで一生懸命やってこられたなかで、いろいろな気持ちもおありかと思いますが、目的は明るい社会をどうやってつくっていくかということですから、新しい体制でやろうと決まったのであれば、少ししんどいですが、「それに任せて一緒に乗って行こうではないか」という気持ちで、やっていただけたら、きっと活性化するのではないかなと思っております。

【豊田常務理事】熱い応援を頂戴いたしまして、ありがとうございました。これから皆さんにお諮りしながら、運動を新しい方向を模索して参りたいと思っております。

それでは、山野井先生より、明るい社会づくり運動に携わるリーダーの具体的実践について、本運動への応援も含めて、お聞かせ願いたいと存じます。

◆リーダーの具体的実践

【山野井先生】冒頭にも触れましたが、この明るい社会づくり運動というのは、立正佼成会だけの活動ではありませんから、それぞれの地域で、皆さんがやりやすいように、本会は陰役に徹して今後も支援をしていきたいと思っております。

それぞれの地域に大勢、素晴らしい考えをもっておられる方がおりますので、そういった方々の英知を結集していくことで、その地域が発展することにつながれば、大変ありがたいと思っております。

地域の発展の基本は、やはり家庭がどうあるかということが中心になると思います。

かなり以前のことですが、臨済宗の松原泰道先生にお会いして、お話を聞いたことがありました。そのときに松原先生が、ある小学校の校長先生と対談したときのお話をしてくださいましたので、ご紹介させて頂きます。

その校長先生の小学校で、高学年の児童に「ひとつのりんごを三等分するにはどうしますか?」という質問をしたそうです。そしたら一人の児童が非常にユニークな答えをしたそうです。

その答えは「ひとつのりんごをまず半分に切ります。そうすると二個になります。その二個をまた半分に切ります。そうすると四個になります」。質問は三等分ですから、四個ではいけないわけで、その一個をどうしたかというと「そのひとつは仏壇にあげます」と書いたそうです。

もちろん解答としては、間違いなのですが、それを聞いた松原先生は校長先生に「やぁー、惜しいことをしましたね、私なら五重丸あげます」とこう言ったそうです。

私もそれ聞いて、まずひとつは仏壇、つまり御宝前にあげようというのですから、その家庭が御宝前を中心

にした、非常にいい家庭だと感じまして、解答は間違えですけれども、何か別の褒め方があったのではないかなと思いました。

こういうことを考えますと、幼い頃から、神仏の縁に触れる、敬うということを、我々大人がしっかりとお伝えしていくことが、非常に大事であると考えております。神仏を敬う家庭からは、親を殺そうという危険な発想は出てこないはずです。

現在、立正佼成会でも「斉家」、つまり家庭を斉（ととの）えようということにつとめておりますが、このことは明るい社会づくり運動にもつながることではないかと思います。

【豊田常務理事】 ありがとうございました。物事の中心は家庭であり、まずその家庭を斉えていく大切さを教えて頂きました。

それでは最後に、来年、岡山県明社の会長に就任予定の菅波先生より、明るい社会づくり運動の役員としての抱負と方向性についてお伺いしたいと思います。

◆役員としての抱負と方向性

【菅波先生】 私もAMDAの中では、自分が仏教徒であるということをしっかり言っております。仏教徒である根拠は、輪廻転生を信じているからです。会場の皆さんを見させていただくと、多種多様な方がいらっしゃいます。きっと前世でご縁があった方が、このなかにいらっしゃるのではないかなという気がしますし、今やっていることが、次の世では前世になりますので、一緒に苦労を共にさせてもらうことによって、また次の世でいいご縁で、お出会いができるのではないかと楽しみを持ちながら、皆さんの顔をじっと見させていただきました。

いままで私がやってきたことで、またお役に立つことがあれば、喜んで明るい社会づくり運動を通じて、社会に還元させていただきたいと思っております。そして、ここにいる皆さん達と、どのようなご縁が結べるかということが、私の最大の楽しみになっておりますので、皆さまどうぞよろしくお願いします。

【豊田常務理事】 ありがとうございました。

本日のパネラーの先生方は、それぞれのお立場で素晴らしい実践をされている方々ばかりでございました。

提唱者・庭野日敬先生は、合理主義と言いましょうか、あるいは偏った平等主義によって荒廃した心の状況を改善し、何とか心を豊かにしたいという願いのために、明るい社会づくり運動を提唱いたしました。私ども明るい社会づくり運動は、この原点をもう一度見直して、提唱者の御心を大事にしながら、皆様と共に進めて参りたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

そして、パネラーの先生方、本日は誠にありがとうございました。